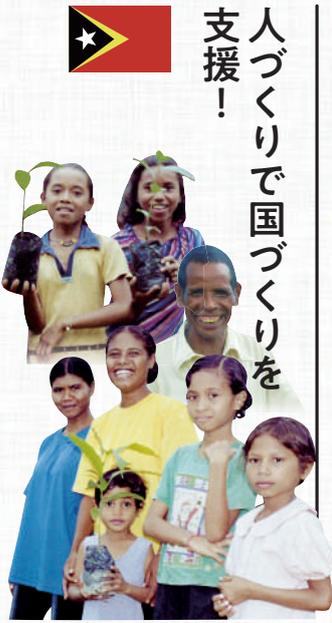


東ティモールの

未来を見据えて

人づくりで国づくりを
支援！



独立から20年の節目を迎えた東ティモールは、21世紀最初の独立国であり、アジアで最も新しい国でもあります。オイスカでは、今年度約10年ぶりに東ティモールからの青年を西日本研修センターに迎えました。同国でのオイスカの活動を振り返るとともに、今回の研修生の送り出しに尽力された元東ティモール大使の北原巖男さんに、同国のこれからの国づくりや研修生に託す思いをうかがいました。



東ティモールでの オイスカ活動

オイスカが東ティモールでの活動を開始したのは2001年のこと。事務所を設置し、農業の振興を担う若者を育成することで同国の発展を応援すべく、研修センターの立ち上げを目指しました。独立前の東ティモールにも、インドネシア人研修生として訪日研修を受けたOBによって設立、運営がなされていた研修センターがあり、農業研修や植林といった活動をしていました。しかし、独立戦争中に建物が破壊されるなどして、センターとしての機能が果たせなくなっていました。そのような中、首都ディリから車



研修センターで行われていた農業研修や規律訓練の様子

で2時間ほどのリキシャ県マウバラに地域開発研修センター（以下、センター）を設立。独立後の新しい国づくりを目指す東ティモールの青年の育成に取り組み、日本へも約20名の研修生を送り出してきました。

青年育成の再開

金確保が厳しくなることが予想され、自己資金でのセンター運営や各種活動の継続が困難であると判断せざるを得ませんでした。

しかし、活動再開から10年ほどたった2011年、センターを閉めるという苦渋の決断を迫られることとなりました。独立後の内戦による混乱もありましたが、最も大きな理由は、協約を結び、共に活動していた現地のカウンターパートからの協力が得られなくなったことでした。国際社会からの多様な援助が投入されてきた独立前後と違い、資金的にも自立を求められるようになった同国の諸団体も、さまざまな課題を抱えていました。

また、日本では同年3月に東日本大震災が発生しており、国内での資

活動が休止状態となっていた東ティモールでしたが、18年の冬、オイスカ本部に届いた一通のメールから研修生受け入れ再開に向けた動きがスタートします。送り主は、東ティモール協会の北原巖男会長でした。メールには、08〜11年の間、東ティモール大使として現地に赴任していた際、オイスカの駐在代表にお世話になったこと、赴任前には本部で現地の状況などを聞き取りしたことが記されていました。また、オイスカの国内研修センターで東ティモールの青年を受け入れてもらえないかという要望も書かれていました。

レオニト君に 聞きました！



—日本の農業を学んでみていかがですか

私の国では、野菜を植えたら植えばなし。管理をしません。ここでは支柱を立てて野菜が倒れないようにしたり、ネットをかけたり、いろいろな管理の方法を学んでいます。手はかかりますが、よい野菜を育てるため、そして、効率よく作業するために必要なことだと理解できました。また、日本には大きいもの、小さいものを含めたくさんの農業の機械があります。国では稲刈りは手で刈るしかありませんが、稲刈り機で作業をするととても速いですね。

—日本で驚いたことはありますか

センターでは、所長が私たちと一緒に農業をします。東ティモールでは、役職者が下の人間と一緒に仕事をするとは考えられないことで、本当に驚きました。日本人は何をするにもいろいろな人が協力して動いています。それがとても素晴らしいことだと思っています。

—国に帰ったらどのようなことをしたいですか？

自分が日本語を勉強したNGOで日本語を教えるつもりです。そのために日本語の勉強も頑張っています。そして、日本で学んだ有機農業をたくさんの人に伝えられたらと思っています。そのNGOでは、日本語だけではなく農業を教える部門もありますので、まずはそこで指導員として活動したいです。私の後に続く後輩を育てて日本に送りたいです。

すぐに本部事務所を訪ねて来られた北原さんの思いを聞いた人材育成部の萬代保男部長は、「農業の発展こそが東ティモールの発展の礎になるとの北原さんのお考えがオイスカと共通していた」と当時を振り返り、「何より、そのための人材を育成したいという強い思いに感動し、ぜひ現地青年の受け入れを進めたい」と

感じたといえます。現地での選考や、北原さんによる国内研修センターの視察などを経て、今年5月に東ティモールから来日したのが、ノロンハ・レオニト研修生です。現在は、西日本研修センターで、さまざまな国から来ている研修生たちと寝食を共にしながら農業を学んでいます。



Q どこにあるの？

A 日本の真南約5千kmに位置していて時差がありません。岩手県ぐらいの大きさです。日本から飛行機で10時間ほどかかります。(直行便はありません)



Q 人口はどれくらい？

A 132万人です(青森県とほぼ同じ)。平均年齢が18歳(日本は46歳)の若者の国です。



Q 何語が話されているの？

A 公用語は2つあり、ポルトガル語とテトゥン語です。ちなみに東ティモールの人たちは自分の国のことを「ロコサエ」と呼びます。テトゥン語でロコは太陽、サエは昇るを意味するので、日本と同じ、「日出ずる国」という意味になります。



Q 主食は何？

A 日本と同様、お米ですが、麺などもよく食べます。



レオニトの入所式に
駆けつけた北原さん
22年5月 西日本研修センター



インタビュー

恒産なくして恒心なし

北原 巖男 (きたはら いわお)

長野県伊那市出身。中央大学法学部卒業後、防衛庁入庁。同長官秘書官、防衛施設庁長官などを経て退官後、東ティモール民主共和国特命全権大使に就任。現在は同国名誉総領事。
また東ティモール協会会長や、伊那市のふるさと大使も務める。

——東ティモールという国について
概要を教えてくださいませんか

15世紀初めに、ポルトガルがカトリックの布教と白檀貿易を目的に東ティモールに來ましたが、その際上陸したオエクシ島が、今も飛び地で東ティモールの領土になっています。それ以降も、オランダが入ってきて領有権争いが起きたり、第二次世界大戦中、オランダ・オーストラリア連合軍が、地政学的に重要であるとして、中立を保っていたポルトガル領東ティモールを占領したり、日本がその連合軍を駆逐するなど、戦いの歴史でした。第二次世界大戦後の1949年、西ティモールはオランダから独立してインドネシアになり、東ティモールはポルトガルの領地に戻ったのですが、75年、独立闘争が勃発し、78年に独立を宣言します。中国やソ連(当時)、ベトナムがそれを支援したため、インドネシアが軍事介入し、翌年、東ティモールを併合。そこから24年間続いた闘争の末、2002年、東ティモールはようやく独立回復を果たすのです。

こうした歴史的背景から、インドネシアとの関係を不安視する声が多いのですが、お互いに未来志向の関係を築いていくことを目指しています。現在、東ティモールはASEANへの加入を希望していますが、それはインドネシアが議長国の際に申

請して、両国民、世界に対して、互いの国づくりを未来志向で行っていくことを強調したわけです。ただ、10年たった今も加入は認められていません。理由の一つは人です。ASEANの議長国は持ち回りで総会のホストも務めなければならず、公用語は英語です。東ティモールには語学、知識、経験の面で、そうしたことに対応できる人材が揃っていないと言えません。しかし、ASEAN 10カ国と比べても、政治民主化度は一番であるという側面も持った国です。

——レオニトが、農業研修に励んでいます。現地の農業技術はどのような状況ですか

そうですね、まだ自給自足的なレベルにとどまっていると言わざるを得ません。今、東ティモールは戦略開発計画(SDP)に基づいて、資源依存経済からの脱却を目指しています。農業・観光・石油天然ガス化学産業の3本柱で国を発展させようと考えていますが、一番はやはり農業です。そして、国づくりのためには人づくりが重要です。特に農業は国づくりの根幹ですから、この産業を支える人材の育成が第一だと考えています。

2008年から大使として、東ティモールに赴任しましたが、当時オ

イスカの研修センターがリキシヤ県にあり、何度か訪問させてもらいました。青年たちが農業を学び、地方に帰って彼らがそこで技術を広めていくという活動をしていました。人材育成は大切なことです。私は中国の孟子の「恒産なくして恒心なし」という言葉をいつも考えています。私の解釈ですが、ちゃんとした産業がなければ、国民は落ち着いた心を持つてられないということだと思います。今、東ティモールは独立から20年たちますが、これといった産業がありません。農業も産業と呼べるレベルに育っていません。自給自足レベルから、産業としての農業を推進していくべきだと考えています。

例えば、東ティモールはコーヒーが有名ですが、ある時、日本のコーヒーの専門家に「東ティモールの人は、自国のコーヒーと他国のものとは比較したことがあるのか」と問われたことがあります。今はまだ、そう言われてしまうような品質なんです。フェアトレードの枠組みで購入してもらおうのではなく、一般の市場で競争していかなければならぬんです。また、アジアのほかの地域でも取り組んでいる生花のリレー栽培の可能性も模索しましたが、日本の業者に相談すると、「日本に輸出できなかった分を消費する国内市場はあるのか」輸送ルートや設備は整

っているのか」など、クリアしなければならぬ課題が山積みだということが分かりました。

現在の経済は、天然ガスによって成り立っていますが、そのガス田は枯渇しつつあります。新しいガスも見つかっていますが、今までのようにオーストラリアで液化するのではなく、今度は自分の国にパイプラインで持ってきて液化したいと考えています。ただ、資金が足りない状況です。将来的に、このままでは国の経済が持ちません。やはり農業を軸として、人材を育てて産業を立てていくことが大切です。人口が増えていく小さい国ですから、若い力を上手に活用していくと、いい国づくりができるはずですが、今回の研修生派遣実現には、「国づくりは、人づくりである」との 新倉会の新倉和歌子理事長の人材育成に対する大変強い



市場の様子。流通面での課題も山積している

思いがあります。

さまざまな形で行われる海外からの支援も必要ですが、それは自走できるまでの伴走であり、自走できればいずれ加速できるようになるかもしれない。独立闘争で亡くなった人たちに、「独立してよかった」と思ってもらえる国になるよう願っています。

——どのように研修生を選抜したのですか。また、彼にどのようなことを期待していますか

ある程度日本語ができる青年がよいと考え、Quesadhip Ruak Center（ケサディップ・ルアック・センター）というNGOで日本語を継続的に学び、明るく、集団生活にも適応できる青年を選んでもらいました。選考にあたっては、同NGOで日本語インストラクターを熱心に務めているボランティアの丹羽千尋さんにご尽力いただきました。

現在レオニトが学んでいる西日本研修センターでは、環境保全型の農業を指導しながら、地域のリーダーとなるように研修生を育成してくださっています。

レオニトの帰国後については、学んだことをしっかり広めてもらいたいとは思っています。ただ、現在は現地にオイスカの研修センターのような活動拠点もない中で、どのよう

に彼が活躍できるのかは、正直何とも言えないところです。農業も人材育成も結局は東ティモールの人たちがやらなければならぬ。将来的にそうなつてほしいと現地NGOとも話していますし、萬代部長も帰国後のフォローアップが大事だと話してくださいっています。よりレベルアップできる機会を与えていただければ、と願っています。

——カンボジアなども研修センターはありませんが、OBたちが協力して活動しています。継続的に研修生を受け入れて、複数のOBが集まって、アイデアを出し合いながら活動していける体制づくりも必要かもしれませんね。

最後に、北原さんのその東ティモールへの熱い思いはどこから来るものなのか教えてください

私は長野県伊那市で生まれました。高遠という山の中で、標高1千mぐらゐのところです。山と山の間の谷底に七軒の家が一行に並ぶその集落は、日も当たらず、「半日部落」と呼ばれていました。東ティモールに赴任する前は、インターネットで情報を見たりして危険な場所なのではないかと思つたこともありましたが、実際に国中を歩いて回ると、自分子どもの頃のふるさとと同じだと感じ、親しみを覚えました。自分のふ



るさどだつて時間をかけて発展してきたのだから、東ティモールにだってできる！と、親しみを持ちつつ、確信しています。思うようにならず、時には頭に来ることもありますが、それでもやっぱりほっとけないというところですね。結局好きなんですようね（笑）。

《インタビューを終えて》

真夏の昼の一番暑い時間帯、七輪で焙煎したという東ティモールコーヒーを携えてオイスカ事務所を訪ねてくださった北原さん。同席した大学生インタンの質問にも、ご自身の経験を踏まえて丁寧にお答えくださいました。「もうコウキ高齢者だから……あ、光り輝く光輝高齢者だよ」と笑う北原さんは、本当にキラキラして見えました。